

第二部 感覚/繁殖のポエジーとペルソナ

〈サウドジズモ〉との決別

1914年、ペソアはサウドジズモと袂を分かち、この決裂はなによりも「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論稿がサウドジズモあるいはこの運動に近い者によって揶揄と侮蔑とによって迎えられたことに起因する。

サウドジズモに属したポルトガルの作家兼評論家エルナニ・シダーデ *Hernâni Cidade*(1887-1975)は、汎神論的超越論に呈示された「ペソアのいかような『実在性 - 魂』、物体と精神の実質的なアイデンティティはすでにシェリングのような哲学者の思索やヴィクトール・ユゴーやジャン・ラオールといった詩人たちの直観的見地に見出されていた」²⁹²のであり、なんらのオリジナリティーも有していない、と否定的な評価した。また、リスボンでペソアと会ったコルテザオンは、「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論考だけでなくペソアのその他の著作もポルトガル・ルネッサンスの詩人や作家たちのルジタニズモやサウドジズモの思想やポエジーについてほとんどなにも言及していないと詩人を叱責した。

こういった否定的な評価が重なり、ペソアの詩「船乗り *Marinheiro*」(1913年9月12日)の『鷺』へ掲載することをサウドジズモの幹部は拒否することとなる。

「静態の戯曲 *drama estático*」²⁹³という副題が付される同戯曲詩の掲載拒否にもっともあからさまにあらわされた「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論稿へのサウドジズモの嫌悪は、ペソアをいらだたせただけでなく、詩人をさらなる弁明に奔走させた²⁹⁴。

だがこういった努力もむなしく(ピント自体はペソアへの一定の理解は示していたものの)、サウドジズモの詩人たちにその意を汲んでもらうことは叶わず、ポエジーの真意を理解してもらえないまま、ペソアは1914年11月12日付けのピント宛ての書簡に「やめた。どんな努力もまったく無益で、書くという根源的行為がばかげた不適切なものだということをすみずみまで納得した」²⁹⁵と認め、ポルトガル・ルネッサンスを脱退する。

ただ、この脱退は、遅かれ早かれ起こるべきものであっただろう。というのも、ペソアは「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論考へのサウドジズモの詩人たちの不快感を払拭したいとしながらも、自身の思考にそぐわないものには、サウドジズモの詩人であっても容赦なく批判の対象としたからである。

ペソアの批判が容赦ないものであったことは、酷評されたサウドジズモの詩人のなかにはロペス・ヴィエイラ(1878-1946)がいたことによって確認できるだろう。

²⁹² Coelho: 245.

²⁹³ Ca: 157.

²⁹⁴ その苛立ちと焦りは、たとえば、ポルトガル・ルネッサンスの幹部で、『鷺』の主幹のひとりでもあったアールヴァロ・ピントへ宛てた当時の書簡のなかにかがうことができる(Ca: 54-55.)

²⁹⁵ Ca: 130

ヴィエイラは、一方で伝統主義的かつナショナリスティックな、パスコアイスに着想を得た、サウドジズモ思想とポエジーの表現者であったが、また一方でヨーロッパにおけるポルトガルのあり方の思索やセバスティアニズモの理論構築に関してペソアアのポエジーや哲学的思考に通底する思想を備える者でもあり、第一部で見たように、レオナルド・コインブラに「唯心論的パガニズム」の潮流にあると評された詩人である。つまりこの詩人のポエジーはほかのサウドジズモの詩人よりもペソアアのポエジーに類同しており、このふたりの詩人の出会いがペソアアによる酷評という不運なはじまりでなければ、ポルトガルの文学のあり方とあり様について創造に満ちた対話が為されていたのではないかと想像させる詩人である²⁹⁶。

ヴィエイラにたいしペソアアは、1913年3月1日に批評雑誌『テアトロ *Teatro*』創刊号に辛辣な批評を掲載する。ペソアアがこの批評を書いた動機は、「昔昔バルトロメオという名前の船長がいました」ではじまる、1912年に上梓されたヴィエイラの児童書『船員バルトロメオ *Bartolomeu Marinheiro*』に描かれたポルトガル人航海者バルトロメオ・ディアスの航海のおとぎ話的世界観、とりわけ、そのなかの「海のまえにはなにがあったのかな？そこには子どもたちが行くのを怖がる/ひとつの暗い部屋」²⁹⁷というような文言に見られる「子どもたちの未発達な美的感覚を単純なだましの手口で損ねる」²⁹⁸ことへの嫌悪によるものであり、ペソアアは同批評のなかでヴィエイラを「犯罪者」²⁹⁹とまで呼んでいる。

このように、ヴィエイラのようなペソアアのポエジーに近い要素を備える詩人であっても、ペソアアの思考に反する場合、容赦のない批判が加えられたのであり、この辛辣な批判がサウドジズモの詩人たちの怒りを買ったことは容易に想像できる。サウドジズモの詩人であるはずの者がこの運動の思想とポエジーに反駁するようなポエジー論を書いただけでなく、同じ運動の詩人たちを批難するとはなにごとだ、と。だがこの批判はペソアアのあたらしいポルトガルのポエジーにとってヴィエイラのような前近代的な思考やポエジーの呈示は否定されるべき理論であり、ペソアアのあたらしいポルトガルのポエジーにとって近代性（現代性）が重要な思想核であったことを示している。つまり思想の視座をどの時代を展望して設定するのかという問題がペソアアとその他のサウドジズモの詩人や作家たちとのあいだに大きな乖離をうみだし、ペソアアのこの文学運動からの脱退を招いた。だがしかし、この両者の相違はペソアアとパスコアイスのサウドジズモの思想とポエジーの解釈にすでに明確にあらわれていたことである。この相違は、たとえば、ふたりの詩人のカモンイスへの価値付けに如実にあらわれている。パスコアイスにとって、カモンイスはポルトガルの魂と大地とを表象する詩人たちの、ひとつの、そしてもっとも重要な源泉である。そのことは、第一部で検討したように、パスコアイスの「ルシタニア精神あるい

²⁹⁶ ペソアアとヴィエイラとの類似性に関しては、Cristina Nobre(2000)や José Castro Seabra Pereira(1990)がある。

²⁹⁷ *Crítica*: 79.

²⁹⁸ *ibidem*, 79.

²⁹⁹ *ibidem*, 79.

はサウドジズモ」の言説やアントニオ・セルジオとのあいだに繰り広げられたサウダーデをめぐる論争（サウドジズモ論争）のなかでの扇情的な主張にみられるとおりである。パスコアイスは、上記の講演のなかでゲラ・ジュンケイロ、アントニオ・コレア・ドオリベira(1879-1960)、アフォンソ・ロペス・ヴィエイラ、ジャイメ・コルテザオン、マリオ・ベイラオン(1890-1965)、アウグスト・カジミーロ(1889-1967)、アフォンソ・ドゥアルテ(1884-1958)等ポルトガルの詩人の名を列挙し、

われわれの魂とわれわれの大地からあたらしい「行動」の予兆となるあたらしい「詩歌」を引き出すことができた。いわば、カモンイスの集合体を構成するこれらの詩人の内で、ルシタニア精神は自らが露わになり広がっていると自覚するのだ³⁰⁰。

と述べたように、詩人たちがポルトガルの魂と大地から「詩歌」を引き出すための本源的な詩人としてカモンイスを規定している。

また、アントニオ・セルジオとの論争のなかでパスコアイスは、カモンイスをポルトガルに刻まれた「個性 *individualidade*」³⁰¹としてシンボル化している。

我が親愛なる友（セルジオ）はカモンイスを排除しようとしている！何たる狂気の沙汰だ！ひとつの「祖国」は何世紀にも亘って刻み込まれてきたその個性が変わることなく抛らねばならない。そうでなければ、この世界で、祖国はひとりの名もなき者、輝きを失った暗闇となるであろう。なによりもまず行動するためには存在しなければならぬのだ³⁰²。

このように繰り返されるカモンイスの偉大さへの賛美はまた、パスコアイスの「過去」認識によりつくられた歴史観へも振り向けられる。

我が親愛なる同志（セルジオ）は「過去」を排除したがつているようだ。（...）。「過去」は不滅であり、われわれがあらたな活力を汲みとる源泉がそのなかでサラサラと音を立てている。われわれが「過去」をもたなかったならばなんと悲しいことであろうか！根が沈む深い大地のない樹木はなんと哀れか！樹木は実を結ぶことができない³⁰³。

パスコアイスにとって、「過去」は今日のポルトガルとポルトガル人が活力を得る泉であり、かれらが大地から萌芽するために張られた根として、カモンイスと同様、一定のシン

³⁰⁰ FS: 28.

³⁰¹ *ibidem*, 72.

³⁰² *ibidem*, 72.

³⁰³ *ibidem*, 68.

ボルとして機能している。このシンボル化は十九世紀末以降にポルトガル第一共和制樹立の文脈で共和主義者および社会主義者が共同体を結びつけるのにもちいたナショナリズムの創造とその鼓舞にもちいられた言説のなかのカモンイスのイメージに合致している。

だが、ペソアにとって、詩人カモンイスは、ポルトガルの「驚嘆の再生とすばらしき復活」³⁰⁴を告げる「偉大なる詩人」あるいは「超-カモンイス *supra-Camões*」とも名付けられた、この詩人を超越する詩人の出現によってそれまでの「国民的」詩人としての地位を剥奪される宿命であった。ペソアは、「社会学的考察」のなかでこの「偉大なる詩人」、カモンイスを超える詩人を「宿命的にいままで首座司教の座にあったカモンイスという大詩人を二義的なものとする」詩人とまで言い切っていたはずである。

また、パスコアイスがカモンイスとともにポルトガルの再生のための源泉とした「ポルトガルの過去」にペソアが大きな価値と意味を見出さなかったことは、一連の「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論稿においてこのあたらしいポエジーの要素としてこの「過去」が援用あるいは言及されていないことから判断できるだろう。この諸論考のなかで顧みられる「過去」は、「偉大な創造期」とペソアが呼ぶあたらしい時代の萌芽の参照項として挙げられるイギリスとフランスの「社会学的」な「過去」とそれとの関係でポルトガル文学に継承されてきたポエジーのあり様が呈示されたときである。

このように、ペソアとパスコアイスという両詩人のあいだには詩人カモンイスやポルトガルの歴史的「過去」の解釈にみられるようなサウドジズモに係る思考的土台の相違がはっきりとみられる。

ひとつの思想を解釈するに際して、原形となる思想が包含しない要素を付加し、それをその思想の根本的要素として再提示することは、すでに原形の思想とは同一性を損なった、あらたな、異なった思想の呈示であり、純粋な原形思想の解釈とは言い難い。パスコアイスのサウドジズモを基部に書かれたペソアの「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論考は、純正なサウドジズモ（パスコアイスのサウドジズモ）の有する意図や構え、つまりは「伝統主義的」あるいは「守旧的」な傾向にならうことなく、与することもなかったのは事実であり、この相違がペソアとサウドジズモとのあいだに埋めることのできない溝として相互の乖離を引き起こした。

だが、とは言っても、「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論考の思考的な基部がパスコアイスによってサウドジズモに理論昇華された二元性の一元的超越の思索と方途を土台としていることは間違いない。ポルトガルの文学研究者ジャシント・ド・プラド・コエーリョ Jacinto do Prado Coelho(1920-1984)が『テイシェイラ・デ・パスコアイスのポエジーおよびパスコアイスに関する著述——詩的情緒の教育 *Poesia de Teixeira de Pascoaes e outros escritos pascoesianos* —— *A educação do Sentimento Poético*』のなかに収録した論稿「フェルナンド・ペソアとテイシェイラ・デ・パスコアイス *Fernando Pessoa e Teixeira de*

³⁰⁴ OFPb: 1153.

Pascoaes」のなかで示唆しているように³⁰⁵、パスコアイスのこの思想とポエジーがなければ、ペソアあたらしいポルトガルのポエジーはこれほどまで明確に理論化され得なかっただろう。また、このポエジーがサウドジズモ/パスコアイスの思想とポエジーに着想を得て理論化された詩(学)論であり、サウドジズモのポエジーにひとつの哲学的、詩(学)的、文学的な方向性を付与した限りにおいて、純粋なサウドジズモの思想やポエジーとは一致しないとしても、ひとつのサウドジズモ論を成しているとも言う。ペソアも「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論考をサウドジズモ論として書き、サウドジズモが備える思想とポエジーをこの諸論考を介して闡明したいと考えていたはずである。

『オルフェウ』的サウドジズモとサウドジズモ的『オルフェウ』を可能とする理路—文学理論(パウリズモ)の両義性

カモンイスの首席司教の地位の剥奪やポルトガルの「過去」に価値を見出すことのないペソアの思想の構えは、この詩人がサウドジズモと袂を分かったのちに進んだ文学的方向にもあらわれている。

ペソアは、ポルトガル・ルネッサンス脱退後、時を置かず雑誌『オルフェウ』の刊行に従事する。『オルフェウ』がポルトガル・モダニズム運動の最初の原動力であったことは議論の余地のないことである。この雑誌が誕生しなければ、ポルトガルのモダニズム運動の展開はまったく装いを変えていたであろうし、この雑誌に関わった詩人や芸術家がポルトガルのあるいはヨーロッパの文学史に名を留めることもなかったかもしれない。それにまた、この雑誌がなければ、これに関わった詩人や芸術家に影響を受けて1927年にコインブラで動き出すこととなるポルトガル・モダニズム第二期の象徴的雑誌『プレゼンサ』(1927年3月10日創刊)も存在しなかったであろう。そうであれば、ジョゼ・レジオ(1901-1969)やジョアン・ガスパール・シモンイスといった若き才能がポルトガル文学に第二期モダニズムの地平を開くこともなかったであろう。

ポルトガル最初のモダニズム的芸術思想を流布し展開したことをそのなよりの文学的貢献とするこの雑誌『オルフェウ』に参加したのは、ポルトガルの保守的かつ自足的な文学を打破し、あらたな息吹を吹き込もうと動きだした若き世代の詩人や芸術家たちであった。

マリオ・デ・サー＝カルネイロ、アルマーダ・ネグレイロス(1893-1970)、アンジェロ・デ・リマ(1872-1921)、ラウル・リアル(1886-1964)、ルイス・デ・モンタルヴォール(1891-1947)、ロナルド・デ・カルヴァーリョ(1893-1935)、ヴィオランテ・デ・シスネイロス(アルマンド・コルテス・ロドリゲスの筆名)、アルヴァロ・デ・カンボス(1890-1935?)、サンタ・リタ・ピントール(1889-1918)等のポルトガル、ブラジルの詩人、作家そして芸術家たちは、キュビズム、未来主義、退廃主義あるいは前衛主義の芸術思想と美学に影響を受け、自らの作

³⁰⁵ Coelho: 237-266.

品へとこれらの思想を組み入れ、反面、過去や伝統への憧憬を無価値なものと公言することを厭わなかった。この傾向は、ネグレイロスがポルトガルの作家ジュリオ・ダントス Júlio Dantas(1876-1962)に向けて放った「反ダントス宣言 *o Manifesto Anti-Dantas*」(1915)や同芸術家が未来主義の可能性を高らかに宣言した「二十世紀のポルトガル諸世代への未来主義的最後通牒 *Ultimatum Futurista às Gerações Portuguesas do Século XX*」(1917)、そしてカンポスの「最後通牒 *Ultimatum*」(1917)のなかでもっとも攻撃的なかたちであらわされている³⁰⁶。またペソアがロペス・ヴィエイラへ向けた前述の容赦ない非難についてカルネイロは3月10日付けのペソア宛ての書簡のなかで「ロペス・ヴィエイラにたいするあなたの批評文にあったすばらしい挑発的な文章の数々はきわめてわたしを喜ばせました」³⁰⁷と綴っている。

『オルフェウ』は、2号まで発表されたのち、財政問題やカルネイロの自殺などの困難にみまわれ、下刷りまで完了していた3号の発刊を待たずに廃刊になる³⁰⁸。だが『オルフェウ』廃刊以降も『逃避 *Exílio*』(1916)『ケンタウロス *Centauro*』(1916)『ポルトガル未来主義 *Portugal Futurista*』(1917)そして『アテネ *Athena*』(1924-25)といった雑誌にペソアを含めた『オルフェウ』の詩人の多くが係わり、深度および強度の違いはあるものの、モダニズム、未来主義、前衛主義、退廃主義を共通項としたこれらの雑誌を介してかれらは自身の文学を呈示するのであり、その文学は一貫してパスコアイスあるいはサウドジズモが奉じたカモンイスやかれらのいう「過去」に依拠することはなかった³⁰⁹。自然、かれらは過去への美化を喚起し価値あるものとするサウドジズモをも批判の対象とした。『オルフェウ』とサウドジズモの両運動が和合しなかったことは、一方でサウドジズモの詩人および表現者たちの多くが『オルフェウ』が創刊されるとこれに罵詈雑言を浴びせ、一方で『オルフェウ』の前衛芸術主義の、モダニズムの表現者がサウドジズモを揶揄することを厭わなかったことから知る事ができる。これらの表現者たちが相互に睦み合うことがなかったのは、一方が啓蒙主義的思想の反動あるいは対抗として人間の感性や想像力を思考核とするロマン主義思想に依拠した運動であり、もう一方がモダニズム思想の牽引者として、キ

³⁰⁶ ネグレイロスによるサウドジズモの詩人・作家のジュリオ・ダントスへの嫌悪の表明「反ダントス宣言 *Manifesto Anti-Dantas*」は、とりわけサウドジズモへの攻撃が辛辣である。

³⁰⁷ CMSCFP: 57.

³⁰⁸ 『オルフェウ』3号は、1983年、ペソア、サー＝カルネイロ、ネグレイロスの作品を収集し刊行されることとなる。

³⁰⁹ たしかに、ペソアはポルトガル語で生前に唯一上梓した『メンサージェン *Mensagem*』(1935)という詩集を1935年に出版してはいる(書きはじめたのは1910年代だと言われる)。だがポルトガルの数多くの歴史的人物が登場するこの作品に詩として昇華されたポルトガルの過去は、おなじ「捏造」であったとしても、十九世紀末以降に共和主義者や社会主義者が政治と結びつけるために「想像」した過去(あるいは「歴史」とは異なる過去、ペソアの想像あるいは幻想の産物としての、共和主義者や社会主義者の政治的文脈とは異なる「過去」が描かれていると考えられる。ペソアが『メンサージェン』のなかで綴った詩の数々は、「あたらしいポルトガルのポエジー その心理学的側面」でも語られた「あらたなインド」への出立の望みであり(「我が偉大なる民は《夢が織り成すもの》つくりだすナウ船で空間には存在しないあらたなインドを探し求め旅立つ。その真にして至高なる行き先は、(...) 神の恩寵を得、現実のものとなる」とあたらしいポルトガルのポエジーを有するポルトガル(文学)の行先をペソアは告知する。)、さらにはポルトガルの未来への投企として概念化されたあらたな「セバステアニズモ」であり、そこにはパスコアイス/サウドジズモが信奉した過去とは別の「過去」が描写されているといえる。

ュビズム、未来主義を導入展開した運動である、という背景的思想の差異により引き起こされたというよりも、これらの思想が伝統的かつ守旧的な芸術（文学）と前進的かつ前衛的な芸術（文学）とにその思想的核を置いていたことに起因すると言えるであろう。したがって、両運動の思想が哲学、歴史、科学、政治等の領域への積極的な横断し、その広がりと同じ方向へ向けることがあったとしても、それがこれらの運動のあいだにある差異を埋め、親和をもたらす積極的要素とはならなかった。またモダニズムの原初的な思考形態のひとつとしてロマン主義的要素を部分的に看取することができ、あるいはこれらの運動の文学者たちの作品内に退廃主義等の補助を以て互いの思想的連関が見られたとしても³¹⁰、両思想の関係を結びつける決定的な要素になることはなかった。

この埋めようもない『オルフェウ』とサウドジズモの拠って立つ思想の差異は、ペソアとパスコアイスのあいだに生じた相違の構造に合致している。とすれば、ポルトガルのモダニズム運動の黎明を告げた雑誌としてポルトガル文学史にその足跡を残す『オルフェウ』のほかのメンバーの意識や意図はともかく、ペソアにとって『オルフェウ』は「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論稿で展開されたこの詩人独自の〈サウドジズモ〉解釈を進展させる場として目論まれていたと推測できる。そう考えられるのは、ペソアがポルトガル・ルネッサンスを抜け、『オルフェウ』の詩人に身を転じてからも、ブラジル文芸評論家レイラ・ペレイラ・モイゼースが指摘しているように³¹¹、サウドジズモ的（あるいはパスコアイシ的）思考を随所に垣間見せながらモダニズム思想を論じ詩化していることに拠る。それは、たとえば、ペソアが「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論考を作品化したと考えられる「船乗り」を『オルフェウ』創刊号に掲載したこと、「彼方（彼岸）- 神」の詩篇を成す「神の声」や「罪過」の詩を『オルフェウ』3号に掲載する予定で刊行を進めていたこと、さらには同誌2号に掲載されたカンポスの詩「海のオード」のなかにパスコアイスが綴ったサウダーデと遜色のないほど豊かなサウダーデの情緒が綴られていること、などによって確認される³¹²。つまり、ペソアにとって、サウドジズモ在籍時に綴られた幾編かの詩は『オルフェウ』を表現する詩になり得たのであり、また未来主義詩人としての側面を強く押し出した異名カンポスの詩のなかにすらサウドジズモのポエジーがはっきりとした輪郭を浮かべあらわれていたということである³¹³。したがって、ペソア

³¹⁰ パスコアイスの作品あるいはペソアと共に『オルフェウ』誌を刊行し、ポルトガル・モダニズムの緒を開いたポルトガル詩人マリオ・デ・サー＝カルネイロの作品にこのような傾向を見て取ることは容易であろう。

³¹¹ PERRONE-Moisés: 17-28.

³¹² このことについては、ペソアが「沼地」と類似する詩法を以て綴られた詩「不条理な時刻 *Hora Absurda*」(1913年7月4日)を1916年に前衛色の強い雑誌「逃避 *Exílio*」に掲載したことも付け加えておこう。

³¹³ カンポスを「未来主義詩人」として知る者が戸惑うのは、未来主義的な詩人と呼ばれるカンポスがサウダーデをなぜポエジーの核のひとつに布置するのかということだろう。時代的な限定は被るものの、たしかにその文学生活のなかで未来主義的な要素を備えた作品を数多く発表し、スキャンダラスな詩篇を紡いだきたカンポスとサウダーデという情緒は一見結びつかない。だが、すでに指摘されているように、「勝利のオード」に代表されるようなこの詩人の未来主義的な詩のそこかしこにサウダーデの感情が散見されており、このことに鑑みれば、「海のオード」にサウダーデの情感の詩節があらわれても奇異なことではない。別言すればカンポスの未来主義的詩篇にはサウダーデの情動が不可欠な要素として包含されているという

アのあたらしいポルトガルのポエジーはサウドジズモと『オルフェウ』との接ぎ木として役割を果たしたと解釈することもできる。

他方、ペソアアのサウドジズモおよび『オルフェウ』への移行とそれらとの関わりについていまひとつ指摘しておくべきことは、「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論稿をポルトガル・モダニズムの担い手となる『オルフェウ』の詩人たちが理解し受容することとなった直接の契機が先に見た詩「沼地」を介してであったことである。

この「沼地」からは文学理論〈パウリズモ *Paulismo*〉が派生するが、『オルフェウ』の同僚たちが自らのポエジーとペソアアのそれとのあいだに見出した親和性はこの理論からうまれる。

パウリズモという名称は、「沼地」の第一節にあった *Paùis* という語句の単数形 *Paul* に接尾辞 *ismo* が付された造語であり、パウリズモと呼びはじめたのは『オルフェウ』に参加することとなる詩人たちだったと言われる。

「沼地」を素地につくられているこの理論は、しかし、ペソアアやこの理論の実践者によって明瞭に体系化されているわけではない。そのため、詩からその理論的特徴を抽出する必要がある。ここでは、ジャシント・ド・ブラド・コエーリョとアルティーノ M・カルドーズがパウリズモ付した特徴をもとに、「主観と客観の意図的な混合」、「関連性のないアイデアの連なり」、「感嘆の名詞句」、「統語論（シンタックス）の逸脱」、「鬱屈、魂の空虚さ、異なるものと得体の知れない彼方への切なる願いを表出する語彙」、「言葉の霊的深遠さを表現する大文字の使用」によって「不定なものおよび未定なものの表現」、「示唆に富む諸感覚の緻密さ」³¹⁴を可能とする文学理論であるとパウリズモを規定しておけるだろう。

このような理論的特徴を備えるパウリズモに『オルフェウ』の詩人や芸術家の姿勢が一貫して好意的なものであったことは、ルイス・デ・モンタルヴォール、アンジェロ・デ・リマ、アルフレード・ギザード(1891-1975)、アルマンド・コルテス・ロドリゲス等『オルフェウ』の詩人や芸術家たちの発言やかれらの作品への同理論の色濃い影響にあらわれている。なかでも、ペソアアとともにポルトガルのモダニズムをのちに牽引していくこととなるマリオ・デ・サー＝カルネイロのパウリズモへの反応は大きく、その影響はこの詩人のポエジーの本質を成すほどであった。

1913年5月6日の書簡のなかでカルネイロはつぎのようにペソアアに記している。

「沼地」について。きみが求めるように、これについて率直に話そう。きみにはぼくを信用してもらいたい。実際勝手な言い分かもしれないが、ぼくを信じてもらいたい。ぼくは「沼地」にただただ驚き、きみについてぼくが知っているもっとも才気あふれるもののひとつだと感じ、理解しそして思っている³¹⁵。

ことである。

³¹⁴ Barreiro: 249.; M. Cardoso: 57-58.

³¹⁵ CMSCFP: 77.

カルネイロの「沼地」への熱中は、上記書簡にある言明以外にも、この時期（1913年から1914年にかけて）のペソア宛てのさまざまな書簡に綴られたこの詩への肯定的な言及と礼賛から知ることができる。これらの称賛に加え、カルネイロは、「沼地」を核とした文学理論を構築することや同理論に沿った雑誌刊行をペソアに積極的かつ具体的に促しており³¹⁶、1915年に創刊される『オルフェウ』誌の構想もこの提案に繋がっている。

カルネイロはポルトガル詩にモダニズム的展開をもたらした詩人としてポルトガル文学史にその名を刻んでいる。実際『オルフェウ』第二号に掲載されたこの詩人の「マニキュア *Manucure*」(1915)、「アポテオーゼ *Apoteose*」(1915)³¹⁷などの詩に駆使された未来派の様式は、伝統的かつ古典主義的な要素を排除し、ポルトガル詩に近代性（現代性）を息吹かせようとするこの詩人の姿勢で溢れている。この詩人のポルトガル文学への貢献のひとつはポルトガルのどの詩人にも先んじてこの国にモダニズムを移植したことにあるが、そうし得たのは、ソルボンヌ大学に留学していた同詩人が同地でいち早くモダニズムの洗礼を受けていたからである。そしてカルネイロがペソアと友情関係を結ぶきっかけとなったのも、カルネイロが留学先からモダニズム思想、とりわけ、キュビズムをペソアに書簡を介して知らせたことをきっかけとする。

翻って、このカルネイロがこれほどまでに「沼地」を専心した主たる事由は、この詩がカルネイロの目ざすポエジーのあり方を具現し、ポルトガル・モダニズムのポエジーのあり様を先駆的に示していたからである。

パウイスはテキスト・プログラムとしての詩の着想とテキストの実践をあらわしている。これは十九世紀と二十世紀初頭のポエジーにたいするポルトガルのポエジーにおける壮大な新奇さであり、50年後の1960年代のポルトガル詩〔「実験詩 *Poesia Experimental*」〕においてはじめて共鳴を見出す前衛主義的な構えなのである。今日、詩「パウイス」は真の先駆的な詩として読まれるべきである³¹⁸。

カストロ・イ・メロ E. M. Castro e Melo(1932-)のこの規定は、1961年にポルトガルの詩人ルイーザ・ネト・ジョルジェ(1939-1989)やガスタオン・クルス(1941-)等によってはじめられたポルトガルの実験詩運動〈ポエジー61〉を念頭に置いて詩「沼地」の前衛性とこの詩の「テキスト・プログラム」としての役割を論じており、それはそれで「沼地」を起点とするポルトガル文学のひとつの潮流のあり様を示してはいる。だが、ここで確認されるべきことは、はじめてこの詩に醇化され、この詩を倣うべきテキストとみなした者がカルネイロであったということである。カルネイロは、メロが指摘したこの詩の前衛性に自己のポエジーとの親和性を見出し、この前衛性の具体的な詩的实践のテキストとして「沼地」

³¹⁶ たとえば、1913年5月14日付けの書簡など。 *ibidem*, CMSCFP: 91.

³¹⁷ カルネイロは1914年6月28日の日付で同名の詩を綴っているが、これらの詩は内容もエクリチュールも異なっており、同題目の別の作品である。

³¹⁸ Castro: 45.

を読んだ最初の人のひとりであり、そしてこの詩を起点としてポルトガルのモダニズムのあり方を具体的に想定し、のちの『オルフェウ』に繋がる表現母体を構想し、ペソアにそれを促したである³¹⁹。

そしてまた、「沼地」を介してはじまるカルネイロのペソアへ傾倒は『オルフェウ』創刊以降も継続した（そしてこの傾倒は、終生つまり 1916 年 4 月 26 日にモンマルトルのホテル・ニースでストリキニーネによりその生涯を自らの手で終わらせるまで変わることなく続くこととなる³²⁰）。そのことは、たとえば、詩「アポテオーゼ」のつぎの詩節を介して理解することができるだろう。

マリネッティ+ピカソ=パリ<サンタ・リタ・
ピントール+フェルナンド・ペソア
アルヴァロ・デ・カンポス
!!!!

MARINETTI + PICASSO = PARIS < SANTA RITA
PINTOR + FERNANDO PESSOA
ÁLVARO DE CAMPOS
!!!!

(マリオ・デ・サー=カルネイロ、「アポテオーゼ」、1915)

この通常の詩法を逸脱した計算法のごとき詩節にあらわされた「<」が不等号記号であるとすれば、『オルフェウ』の同僚であり、ポルトガル芸術に未来主義を確立することに寄与したポルトガルの芸術家サンタ・リタ・ピントールとフェルナンド・ペソアそしてアルヴァロ・デ・カンポス、あるいはサンタ・リタ・ピントールとフェルナンド・ペソアの総合としてのアルヴァロ・デ・カンポスはマリネッティとピカソの芸術的な知に優るものとしてカルネイロに理解されており、「沼地」にはじまるこの詩人のペソアへのより強い傾倒があらわされている。

このようにカルネイロは「沼地」に自身の追求するポエジーとの親和性を見出して以降、ペソアへの強い傾倒を示していく。ただ、この傾倒がカルネイロの一方通行でなかったことはペソアのカルネイロのポエジーへの受容の態度にあらわれている。この態度は、たとえば、かれらのあいだで交わされた書簡などから知ることができ、書簡のなかでペソアはカルネイロのポエジーにたいする、ときに好意的で、ときに敬うかのような、受容の態度を示している³²¹。

³¹⁹ 詩「沼地」の特徴を誰よりも受容し自らの詩作に実践するカルネイロのポエジーの構えから（パウリズモ）の理論展望がペソアだけでなくカルネイロによっても為され強化されたと主張する者もいる。

³²⁰ カルネイロはペソア宛ての書簡のなかで幾度か自身の自死をほのめかしている。

³²¹ Ca. など。

ただし、カルネイロがペソアに見出した親和性が「沼地」のあらゆる強い前衛性やモダニズム的な性質によってもたらされたものであったのにたいし、ペソアのカルネイロへの親和性は「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論稿としてあらわされたペソアのサウドジズモの思想とポエジーのなかで測られていたと考えられる。つまり、カルネイロからペソアへ向けられた親和の質とペソアからカルネイロへ向けられたそれとは（とりわけ、サウドジズモから『オルフェウ』の詩人たちとの交流のはじまった当初において）、異なっていた。

ペソアは、サウドジズモ在籍時、幾度となくカルネイロの詩を『鷺』に掲載するべく同運動の有力者に働きかけている³²²。ペソアのこの行動は、この詩人が自身のサウドジズモのポエジーとカルネイロの詩にあらわされたポエジーが呼応しているとみなした結果である。したがって、ペソアとカルネイロがともに「沼地」にポルトガル文学のあらたな地平を開く可能性を展望しパウリズモという文学理論を構築したことに間違いがないとしても、一方で、カルネイロはペソアをポルトガル・モダニズムの文脈で測り、一方で、ペソアの側では、この詩人の特異な解釈によって成り立つものであっても、サウドジズモの思想とポエジーの文脈においてカルネイロのポエジーを測る、という相互の認識にずれが生じている。

このことは、ペソアにとって「沼地」はあくまで「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論稿を理論的な核とした詩的昇華であり、カルネイロや『オルフェウ』の詩人たちがこの詩から正統なサウドジズモの性質を払拭したうえで「沼地」を解釈し、パウリズモを自身のポエジーに援用することを試みたとしても、ペソアは自身が改変したサウドジズモとの結びつきを断つ意図を「沼地」に見てはいなかったことを示している。ポルトガルの文学世界で消えかかっていたペソアを1920年代に「発見」し、詩人として延命することに尽力したジョアン・ガスパール・シモンイスはパウリズモを「理知化されたサウドジズモ」³²³だと評言したが、かれがパウリズモとサウドジズモとの結びつきについてこう言及し得たのは、パウリズモがペソアのサウドジズモから生成された理論であり、つねにペソアの思索したサウドジズモに密接であることを理解していたからである。

さて、ここまで確認してきたことをまとめると、ペソアはあたらしいポルトガルのポエジーの表現者としてサウドジズモの詩人たちを想定し、あらたなポルトガル詩の地平にかれとともに踏みだしてくれることを望んだ。だが、ポルトガル文学のポエジーのあり方をそれぞれの方途で呈示しようとしたサウドジズモとペソアとのポエジーのあいだにひろがる根本的な思想的乖離はその親和と共振とを不可能とし、結果、両者の関係は破綻し、ペソアはこの運動から去った。自然、ペソアのサウドジズモ思想を詩化した「沼地」が純正のサウドジズモの詩的公準となることもなかった。他方、ペソアがあたらしいポルトガルのポエジー、あるいはサウドジズモの思考を詩的に込めた「沼地」は、ポルトガ

³²² たとえばペソアは1913年6月13日付けのアルヴァロ・ピント宛ての書簡のなかでカルネイロがリスボンに来る際にこの詩人にたいして『鷺』への寄稿について話す旨伝えている。Ca: 96.

³²³ Simões: 190

ル・モダニズムの地平をポルトガル文学に開いた『オルフェウ』の詩人たちにより受容されることとなり、パウリズモとして理論化され、これらの詩人の詩的要諦となり、サウドジズモとは別様のポルトガルのポエジーの思考パラダイムを開くこととなった。

だが、〈サウドジズモ〉および『オルフェウ』の詩人たちの解釈がどうであれ、ペソアにとって、「沼地」は近代ポルトガル詩のあり方をサウドジズモというあたらしいポルトガルのポエジーに託した詩的实践であった。よりよく言えば、この詩はペソアがサウドジズモを独自に解釈し理論化したあたらしいポルトガルのポエジーの美学的あり様、「とらえがたさ、得体の知れなさ」、「精緻」、「複雑さ」という要素の具体的な詩的昇華であったのであり、したがって、純正のサウドジズモの詩人たちがこれを肯定的に受け入れられなかったとしても、あるいはこの詩から抽出されたパウリズモをポルトガル・モダニズムの詩人たちが自らのポエジーの範として受容したとしても、この詩（とその背景にある思考）はあたらしいポルトガルのポエジー、つまりはペソアのサウドジズモに依拠しており、純正のサウドジズモや（狭義の）ポルトガルのモダニズムの概念や範疇あるいは『オルフェウ』の文脈でのみはかることはできない。

だから、サウドジズモから雑誌『オルフェウ』への過渡期のペソアの思想について考えるとき、この詩人が前衛性を得るために自身の思想からサウドジズモを放棄したとか、サウドジズモのポエジーから前衛主義へ転向したとか考えるべきではない。ペソアのサウドジズモの思想とポエジーは、この詩人がこの文学運動において文学活動を開始してから一貫して、パスコアイスの解釈とは異なるかたちで理解され呈示されてきたのであり、ペソアの解釈によりつくりだされたサウドジズモの思想体系のなかには当初から前衛性が包含されていたのである。したがって、ペソアは一度として自らのサウドジズモを自身の思索から棄却したことはない。このことは、前述のモイゼースが述べるように、サウドジズモからモダニズム運動に身を転じたペソアの論じる未来主義がサウドジズモの要素を継続して備え、「(ペソアにとって) サウドジズモと未来主義とのあいだには矛盾はなく、イデオロギー的かつ美学的の一貫性がある」³²⁴ことから理解できるのである。

したがってペソアは、そのサウドジズモも『オルフェウ』についての思索も本来の思想と十全と合致していないにもかかわらず、サウドジズモとモダニズム思想を矛盾することなく同時に備えることとなった詩人であり、くわえて、この詩人が双方の運動と思想のどちらにも依拠しないという矛盾した、特異な立場にいた詩人ということになる。

そしてまた、この本来つながれることのないサウドジズモと『オルフェウ』の両思想をつなぐ線分をつくりだすペソアのサウドジズモ的思考と『オルフェウ』的思考との連続性、すなわちこの詩人のサウドジズモ的『オルフェウ』思考あるいは『オルフェウ』的サウドジズモ思考は、ペソアが意識的であったかどうかは定かではないものの、結果として二元的対照事象の一元化によって非両立状態を両立させているという意味において、あたらしいポルトガルのポエジーの、汎神論的超越論の思索のひとつの具体的実践と言いい

³²⁴ Perrone-Moisés: 17.

うるのである。

このような背景を念頭に置き、第二部では、あたらしいポルトガルのポエジーからパウリズモへと進展したペソア思索がこの詩人の総括的思考である感覚主義へとどのような変遷を経て辿りついたのか、そしてこの感覚主義がさらにどのように変容進展したのかを分析していくこととする。

第一章 感覚のポエジーの生成

1. 〈交差主義〉と「斜の雨」－〈パウリズモ〉と〈感覚主義〉を結ぶ理路

1912年に著した「あたらしいポルトガルのポエジー」諸論稿の思索を皮切りに「黄昏の痕跡」の詩に同論考を昇華させ、その文学理論パウリズモによってあらたな文学的地平をポルトガル文学に広げるに至ったペソアは、この一連の思考にあらたな諸要素を追加し、理論的進展をおこなう。その第一の進展が〈交差主義 *Interseccionismo*〉であった。

ペソアによれば、この交差主義は、一方で「あたらしいジャンルのパウリズモ」³²⁵の体を為す文学理論であり、また一方でキュビズムと未来主義の思考と美学に影響を受けて着想、理論化されている。ペソアがキュビズムを知るきっかけとなったのがマリオ・デ・サー＝カルネイロからの紹介によるものであることはすでに確認したが、そのカルネイロは1914年2月2日付けの書簡のなかでこの交差主義を「重大なものとしてのパウリズモ」と述べ³²⁶、これをパウリズモの進展形態と認識している。

ペソアとカルネイロは、パウリズモを思索した際に具体化することの叶わなかった文学理論に基づく雑誌編纂を、交差主義に係るアンソロジーの刊行というかたちで具体化するよう試みている。結局、この構想も具体化することはなかったが、このアンソロジー編纂計画においてペソアとカルネイロはポルトガルの詩人アルマンド・コルテス・ロドリゲスに詩作の依頼をおこなっており³²⁷、1914年10月4日の同詩人宛ての書簡においてペソアは「社会的にもパウリズモ的にも、まだまだ子どもだから、フェーロやモウラオンなどをこのアンソロジーに含めないことにした」³²⁸と綴っている。ここに名前を列挙されたのは、おそらく、『オルフェウ』の編集者のひとりであった詩人のアントニオ・フェーロ(1895-1956)³²⁹等のことだと思われるが、ここで「パウリズモ的に」という訳語を充てた *paucicamente* という副詞語は詩「沼地」にあらわれた *Paus de roçarem ânsias pela minh'alma em ouro...* の *Paus* を副詞化したペソアの造語である。この「パウリズモ的に」という副詞が

³²⁵ Ca: 124.

³²⁶ DFP: 363.

³²⁷ Ca: 126. 興味深いことに、この書簡のなかで示された同アンソロジーの目次では「斜の雨」の作者としてアルヴァロ・デ・カンポスの名が記されている。

³²⁸ *ibidem*, 127.

³²⁹ アントニオ・フェーロは、詩人、雑誌編集者という肩書だけでなく、ジャーナリスト、政治家、国家宣伝局長官等の職務にも従事した。